私たちは、自閉症という障害をもつ人たちが、彼らなりに社会の一員として自主自立をめざし、豊かな人生を生き抜くよう共に道を拓いていくことを目的としています。

檜の里

平成９年６月20日発行／第32号

社会福祉法人　檜の里
三重県三重郡菰野町杉谷1573
郵便番号／510-13
電話（0593）94－1595
発行責任者　　石丸　晃子

あさけ学園 C棟の生活

▲　食後、リビングでくつろぐC棟の住人

◀　「今日の食事もおいしそうね！」

（「C棟の生活」の関連記事は4面に）

あさけ学園によせて

心理的自立とその基盤にあるもの

東海大学健康科学部
社会福祉学科教授　小林隆児

あさけ学園の見学は、ずっと以前からの念願でした。園長の説明を聞きながら利用者の生活空間を拝見していて、皆さんの生活ぶりが伝わってきてとても心地いい気分になったものです。事例検討では一人の園生の社会的自立に関する話題が討論されました。ややもすると終生の生活の場と固定的に捉えられやすい施設での生活を、社会的自立のための準備の場として位置づけ、自立援助のために努力されている園生、家族、職員の方々の姿を知り、心揺さぶられるものがありました。

自立することは経済的に親の負担をかけないで一人で生活することと捉えがちですが、われわれはもっと大切な視点をもたなくてはなりません。つまり心理的な自立を考える必要があるのです。たとえ多くの人々の助けを必要としたとしても、自分の心の中に能動的に生まれてくるような意欲を大切にすることによって、社会の中で他の人々とともに生活している自分の存在を発見できること、その中で自分のことを自分で判断し物事を実行できること、私はこんな姿を心理的自立と呼んでみたいと思うのです。人間誰しも他者の助けを借りないで生活している訳ではないのです。

私は勤務している東海大学健康科学部にマザー・インファント・ユニット（母子治療室）を作り、この二年間、母親と子どもの関係そのものを治療するという新しい試みを行っています。そこではこれまでに言われてきた常識を覆すような新たな発見に出会うことが少なくありません。

その中で最も痛感するのは、われわれ大人が子どもの心とずれたところで一所懸命に働きかけていることがいかに多いか、親の思いと子どもの思いのずれがあまりにも大きいがために、関係づくりの基本的な部分でいつも失敗を繰り返しながら、親の努力が徒労に終わってしまっているということなのです。彼らには彼らの思い、願い、意図などが存在することは頭の中では分かっているつもりでも、実際の対人交流の中では両者の歯車がかみ合わない状態がずっと続いていることが多いのです。われわれの持っている彼らに対する人間観はどこか間違っているのではないか、そんなことさえ考えるのです。

彼らのものごとを感じ取る感性は、われわれのそれとは質的に大きな開きがあることをまずもって実感することが必要になります。そんな基本的なことをないがしろにして、われわれの教育観、価値観を押しつけてしまい、いかに彼らの人格発達の基本的な部分を歪めてしまっているのか、強度行動障害と称される人々を診ていると、そのように感じないではおれないのです。

人間の感性は生まれた時点で個々みんな違うように思います。自分の周囲の世界を知覚する際にどのような事象に惹かれていくのか、そのようなことを大切にすることが彼らの能動性を引き出していくためには不可欠です。

そんな子どもの感性や個性を、われわれが喜びを持って発見することができれば、彼らの心は大きく大きく膨らんでいくのです。心理的自立の基本には、そのような関係の基礎づくりがとても大切なように思うのです。